



目覚めたら、
別のひと



saolipooh

目覚めたら、別のひと

私は、病気を持っている。今すぐ命に別条があるような性質のものではないが、かなりの重症で、通常の日常生活を送るのは困難であるため、障害年金をもらい、国の所有する住居に住んでいる。家族は、いるのかわからないが、特殊な病気のせいで、1人で暮らしている。私の病気は、「後天性多重人格症」といって、多重人格症の一種である。意識がある間は、記憶も人格も異常がないが、眠ってしまうと、次にいつ「私」の人格で目覚めることができるか分からない。たくさんの人格が、同じ体を共有し、眠る度に入れ替わるのだ。順番や周期があるのか、どんな人格がいったい何人、この体に宿っているのか、そういったことはまるでわからない。他の人格の間の記憶はないので、いつのまにか歳をとり、「私」には断片的な人生しか与えられない。何をしても、誰と出会っても、眠りの後には、全て消え去ってしまう。こんな虚しい生き方は、苦痛なだけだ。私は、だんだんと生きる希望をなくし、1日をただ無為に過ごした。どうせ、何かを学んだとして、何かをやろうとしたところで、眠ってしまえば、終わってしまう。いつ、次に私が目覚めるのか、もしくは、永遠に眠ってしまうのかもわからない。そんなことで、人生に目的をつくっても、仕方がない。そんな風に思うようになっていった。死が生の対極ならば、死の心地よさはどれほどか。目覚めた私は、この世に戻されたことを残念に思う。どうしてこんなことになったのか。きっと過去にトラウマがあるのだろうが、私は、知らない。

ある日、初めての街で目が覚めた。私の知らない家で、知らない男の人と一緒に、裸でベッドに入っていた。隣の男の人が目覚めないうちに、私は慌てて床に散らばっていた服を着た。どの服も見覚えがなく、手当たり次第集めて着たので、そのシャツは、男のものだったのかもしれない。とにかく急いで部屋を出て、街へ飛び出した。

繁華街のようだった。若い人が多く、みな、おしゃれをして歩いている。私は1人、体に合わない服でうろうろと歩き回った。とにかく家に帰ろうとしていた。ふと、通りかかったインテリアショップに気を惹かれた。通りに面した壁が、全面、ガラス張りのおしゃれな店で、中の様子がよく見えた。洗練されたシックな家具が置かれているなか、店の奥の壁に小さな絵がいくつか掛けられていた。私は、なぜかそのお店に入ってみたくなった。

こじやれたイス、机、ソファ、棚・・・

しかし、私は、まっすぐに奥の壁に向かった。額縁に入れられた生の絵画が並んでいた。その左端の絵に私の目は吸いつけられた。べったりとした絵具で、たくさんの色が塗りつけられ、しかし混じりあわず、かといって絶妙なバランスで色と色がひきたて合い、深い風景をなしていた。それは、きっと景色なのだろうと思ったが、抽象画らしく、実のところはよくわからない。けれども私の目は忙しく、さまざまな色合いに誘われ、惑い、遊んで、それぞれの色が導く形態にさまよった。不思議に、心が落ち着いた。そして、腹の底から、あたたかなどっしりとしたものが、こみあげてくるようだった。それは、エネルギーだった。

人生に失望し、ただ浮遊することに慣れ、やりたいことなど何もなかった私に、初めて流れたエネルギーだった。私は絵を描くことに決めた。

手元のお金を全て使い、慣れない絵画道具を購入し、知らない道端で、キャンパスに色を塗りつけていく。絵を教わった覚えはないので、とにかく心の動くまま、ただ絵と真正面に立ち向

かい、それだけで精一杯だった。私のエネルギーは、尽きることがなかった。食事もせず、ほとんど水も飲まず、もちろん、一睡もしなかった。寝てしまえば、次にいつ自分に戻れるのか、この途中の絵がどうなってしまうのかも分からなかったのだから、眠ることなどできなかった。しかし、それでも、私の中でエネルギーは燃え続けた。この絵をどうしても仕上げたかったのだ。私は、なぜこんなにも頑張っているのだろうか。自分のためか、それとも誰かに見てもらいたいがためか、芸術のためだとでも言うつもりだろうか……。答えは出ないが、かまわなかった。

ついに精魂尽き果て、意識が遠のいていくのを感じたとき、私の手元には、どうやら絵と呼べそうなものが一枚、できていた。絵を描き始めて何日が過ぎたのか、もはやわからなかった。私は、目を閉じながら、次は、この絵にいつ会えるのだろうか、とのおしく考えた。もし、このまま、「私」が消えても、「彼女」が、この絵に巡りあってくれればいい。

私の意識は、そこで終わった。